

玉川上水の歴史

1 玉川上水の開削

○玉川上水開削以前の江戸の水事情

天正18(1590)年、徳川家康の命令で、家臣大久保藤五郎が小石川を水源とし、神田方面に通水する「小石川上水」を作り上げたと伝えられています。やがて江戸の発展に応じて拡張され、寛永6(1629)年頃、井の頭池や善福寺池・妙正寺池等の湧き水を水源とする「神田上水」が完成しました。

一方、江戸の南西部は赤坂溜池を水源として利用していました。

慶長14(1609)年頃の江戸の人口は約15万人ほどでしたが、三代将軍家光のとき参勤交代の制度が確立すると、大名やその家族、家臣が江戸に住むようになり、人口増加が加速しました。そのため、もはや既存の上水だけでは足りなくなり、新しい水道の開発が必要になりました。

○工事の決定、実施

承応元(1652)年、幕府は多摩川の水を江戸に引き入れる計画を立てました。庄右衛門、清右衛門兄弟を工事請負人に任命し、工事の実施が決定しました。承応2(1653)年4月4日に工事に着手し、羽村取水口から四谷大木戸までをわずか約8か月で開削しました。羽村から四谷大木戸まで、約4.3キロメートルの区間を約92メートルの標高差(100メートルでわずか約21センチメートルの高低差)を利用して水を流すように設計されており、当時の水利技術の高さがうかがえます。

翌年6月には虎ノ門まで地下に石ひ、木ひによる配水管を布設し、江戸城を始め、四谷、麴町、赤坂の台地や芝、京橋方面に至る市内の南西部一帯に給水しました。

工事に尽力した兄弟は、褒賞として玉川の姓を賜りました。